米国財団法人野口医学研究所医学交流セミナー開催

米国への臨床留学志望者が急増 セミナー参加者は増加傾向に

米国財団法人野口医学研究所は昨年12月11日（土）、12日（日）、「米国臨床留学で何を成し遂げるか」をテーマに、「医学交流セミナー」および「2004年度米国医学研修生選考会」を女子栄養大学駒込キャンパスにて開催した。1日目のセミナーには90名の受講生が参加。その内訳は医師が38名、医学生51名、歯科医師が1名であった。当日は全国各地から集まった受講生で会場は活気に溢れていた。2日目の選考会には、37名の医師と医学生が臨んだ。

各講義の途中や終了後には、積極的に質問が出され、会場内は参加者の熱気に終始包まれていた。

セミナー参加者の九割が海外留学への意欲向上！

米国の医学教育では、医学研究と同等に実地臨床能力の養成が盛んに行われており、指導医が研修医を教え、研修医が医学生を教えるといった屋根瓦方式の教育システムが確立されている。そして研修病院では、クリニシャン・エデュケータ（臨床医かつ教育者）と呼ばれる臨床教育の専門家が研修医の指導を担う。さらに、臨床経験においても、日本とは比べものにならないような経験を積むことができる。

一方、日本でも医学教育を充実するために、臨床研修制度に対する改革が実施された。すべての研修医が、ある一定レベルの臨床能力を身に付けることを目的に、今年度から臨床研修を必修化。しかし、この新医師臨床研修制度の開始に伴い、研修病院が急増し、急ごしらえの指導医も多数誕生している。経験不足から的確な教育や指導が覚束ないほか、ストレート研修で育った指導医が多いため、スーパーローテート方式に対する戸惑いを感じているケースも少なくないようだ。こういった現状からも、米国への臨床留学は、医師としてのスキルアップを図る有効手段の一つと言えるだろう。

若手医師や医学生の臨床留学に対する関心の高さは、同研究所のセミナー受講者数やセミナー受講後のアンケート結果にも顕著に表れている。ここ数年、同研究所の受講生は増加傾向の一途を辿る。今回も全国から一〇〇名近くが参加。セミナー受講後のアンケート調査では、参加者の九割以上がセミナーの受講に満足しているうえ、海外留学へ意欲的になったと答えているという。

CVは短い期間ではなく毎日書き留めていくもの

開会の挨拶では、東京慈恵会医科大学の北嘉昭氏が「英語は医学を学ぶために不可欠なツールである。そのツールを最大限に活用し、自己の見聞を広め、若い医師には医学界のスーパースターになってほしい」と力強く語った。

続く「留学の基本」と題されたプログラムは2つの内容に分けられ、現在、米国で活躍中の医師がそれぞれ講師となり、展開された。まず「書く基本」をテーマにCurriculum Vitae（以下、CV）の書き方と考え方について、講演が行われた。

そのなかで講師の齋藤中哉氏（ハワイ大学医学部医学教育部PBL腎臓部門主任・医学教育特別顧問）は、「レジメは目的を持って書いているため、自分自身の今までの実績をかなり凝縮したものとなります。ところが、CVは日本の履歴書にはない、プロフェッショナルとしての経歴です。ですから、数週間や数カ月で書けるものではありません。長い年月をかけて毎日、書き加えていくものです」と指摘した。また、齋藤氏が臨床留学を目指した当時、日本の大学や臨床現場では、CVの書き方を指導してもらえずに苦労したという自己の体験を踏まえ、「ハワイの大学へ留学した際には、現地の大学教授のCVをいただき、活用できるところは参考にしました。留学を希望する大学に問い合わせれば、必ず参考になるものが見つかるはずです」とアドバイスを行った。そのうえで、希望する大学や目的に応じて、これまでに書き留めたCVを編集し直す必要があると強調した。

講演後の質疑応答の際には、会場からの「CVはどれくらいのボリュームが適切であるのか」という問いに対して、「自分自身の経歴を個人がどう捉えているかがポイントとなるため、CVに長さの制限がある大学は存在しない」と返答した。

次に、「話す基本」をテーマに、インタビューの受け方について、津田武氏（A・I・デュポン小児病院循環器スタッフ専門医）が解説した。講義のなかで、津田氏はインタビュー時のポイントをこう語っている。「ゆっくりでもいいので、丁寧な英語で話し、自分自身の持つ医師としての強さやユニークさをアピールすべきです。自分自身のウイークポイントを自ら言う必要はまったくありません。向上心と熱意を前面に押し出すように心がけてください」

そして、ファミリーメディスンにアプライしてきた医学生という設定で、会場の受講者に参加してもらい、ロールプレイングを行った。その終了後、「面接時に聞かれるポイントについて、頭のなかである程度の答えを準備しておかなければならない。面接時間はおよそ一人三〇分ですが、面接官が興味を示せば、時間は延長されます。そうなれば、合格したようなものです」と付け加えた。

「話す基本」をテーマにした津田武氏の講義では、実践さながらの模擬面接が行われた。

留学時の活発的な活動が海外での臨床医への近道

午後の特別講演では、慈恵医大附属病院脳神経外科の村山雄一氏が同研究所を通じて、臨床留学した経験について講演を行った。同研究所を通じて、米国へ留学する場合、たとえ、短期間の留学でも見学だけでなく、内科では現地の判断により実際に臨床に携わることができる。また、留学時に活発的に活動すれば、研修医としての道が開けると話している。

実際に村山氏は留学時には基礎研究歴はなく、一年間の臨床見学を目的に留学した。当初の目標は臨床論文と研修論文を一つずつ書きあげ、動物ラボで技術向上を図ろうというものだった。しかし、留学中に提案した研究プロジェクトが認められ、九年間の海外生活をおくることになった。村山氏は「有能な施設でも弱点がないわけではありません。レジデントではなく、テクニカルフェローとしてのトレーニングを希望するのであれば、留学先に認めてもらうための研究プロジェクトが必要です。自分の専門領域にも興味を持ち、明確なコンセプトを作ることが重要でしょう」と参加者に助言を贈った。

また、選ばれる人材となるには「情報処理能力に長けている」、「器用である」、「ナイスガイである」などが不可欠であるとしている。特にいい笑顔ができなければ、現地で活動することは難しいと指摘している。

特別講演の終了後、内科、外科、小児科、医学教育という参加者の専門科目や興味のある診療科目ごとにイントロダクションが行われ、一日目のセミナーは幕を閉じた。

今後も同研究所ではこのようなセミナーや選考会を通じて、一人でも多くの医師や歯科医師、看護師が米国へ留学できるように努めるとともに、財団独自の「野口英世記念病院」を世界に通用する国際病院へと発展させる方針だ。 B

「CVには、一般的なフォーマットはない。希望する大学に応じて編集することが不可欠です」と話す齋藤中哉氏

問合せ先
米国財団法人
野口医学研究所日本事務局
〒105-0001
東京都港区虎ノ門1-20-7
松栄虎ノ門第二ビル5F
TEL：03-3501-0130
FAX：03-3580-2490
URL：http://www.noguchi-net.com
e-mail：ryugaku@noguchi-net.com